

「慈しみ」の思いは、手から手へ

佐藤 厚子

愛知学院大学の歯科衛生士教育に47年間携わり、出会い支えてくださった多くの教職員、学生の皆様に心より感謝申し上げます。

また、歯科衛生士の教員として短期大学部前学科長の高阪利美先生とは46年間、そして最も近くでいつも支えてくださった後藤君江先生と40年間、原山裕子先生とも30年間という人生の半世紀近くの長きに渡り、共に過ごし、教育の場で毎日無事に過ごさせていただけた御恩に対しまして、この場をお借りし心より深く感謝いたしますとともに厚く御礼申し上げます。

定年退職という期に執筆の機会をいただきました。ここに私を育ててくださった恩師や教育の理念として芽生えることができた心の思いに触れさせていただきます。

1. 「慈しみ」の思い

私が担当してきた科目は、臨床実習、歯科予防処置論実習を始め、技能を伝える実習科目が主となります。特に歯科衛生士教育は、基礎知識はもちろんのこと、医療の場で患者さんの歯・口腔の健康を守り維持するための支援、特に手技をもってその責務にあたる部分があります。もちろん、その手技は多くの研究や裏づけであるデータにのっとり作り上げられてきたものですが、必ず「手」を通して発信されるものです。特に口腔内で操作するスケーラーなどの刃物類や器械を使用して健康に導いていく手法は、粘膜や歯肉で覆われ繊細な組織で構成された口腔内で行う数ミリ単位の操作であり、その安定した操作には、手の構造と機能の特性を理解しての動きが必要です。また、指先に伝わる感覚がすべてを左右します。安全で安心できる手技でなければなりません。これは、唯一歯科医師と歯科衛生士が行うもので法的にも独占業務に位置づけられています。技術をマスターすること、安全な操作ができる「手」を作り上げることは、学生にとっても自分の手の特質を理解し、動きや感覚の獲得に歯科という専門分野に入った最初から向き合います。これは毎

日の積み重ねが大切であり、教員側も手技内容が進むにつれ、修得時期やその学年の状況に沿ったカリキュラム構成や内容に年々検討し、毎年「同じ」のようでも同じではない、変化が伴うものです。困っている手つきはないか、力が入るか、持ち方は理解できているかと目を見張りながら臨みます。

基礎力がついてくると、施術者の心の動きが手に載って動くようになります。それが「手」を通して相手に伝わります。「心の動き」となる思いは、精神によって作られるものであり、それは愛知学院の建学の精神、特に医療人としての精神の教えに繋がります、その教えが「慈しみ」にあると考えます。

「慈しみ」は、母親が子供を無償の愛で育てる思いです。この言葉は、前愛知学院大学学長の故小出忠孝先生が、歯科衛生士教育で臨床実習に出る前の「載帽式・登院式」において、いつも学生に説いてくださった教えです。

私も医療人としてあるべき心は、この「慈しむ」思いが原点と考えます。式典でいつも心洗われました。学生も今まで学んだ知識、修得した技能は、すべて患者さんに健康で幸せな人生を過ごしていただくためのものと学びますが、「なぜ学んできたのか」のすべてが、この精神にあると心する瞬間です。この言葉をいただいた学生の姿勢は背筋がぴんと伸び、顔つきの変わる瞬間であり毎年目にしてきました。物静かにいつもこれから医療の現場に出る心構えを説いてくださいました。これは愛知学院だからこそ受け継がれてきた変わらぬ心の真髄です。これからも医療界が進歩し、技術や機器が発達しても、脈々と受け継いでいかなければいけない、決して変わってはいけない精神と考えます。

私事ですが、隣人に歯科衛生士学院時代の第1回生の先輩が偶然住んでおられ、卒業から60歳を迎えるまで現役で歯科衛生士を一般歯科診療所で勤め上げられていました。ある時患者さんからかけられた言葉が「歯科衛生士さん、歯科衛生士さんの手は先生より優しいね」と。「これは、愛知学院の脈々と受け継がれ

ている教え、技術教育の源だからね。続けてよ、頼むよ。」と私の歯科衛生教育、手技教育の根源に火がついた瞬間でした。

「優しい手」はどこから来るのだろうか、きっと「思い」が手に載って伝わるのだと。歯科用ミラー一つ扱うにしても、ただ頬を引っ張るだけではなく、知識として得た筋肉の走りに沿い、収縮する方向を考え、「痛くはないだろうか、怖くはないだろうか」常に相手を思う「慈しみ」の心を持って臨めば、おのずとその思いは手を通して伝わります。優しく操作できたとき、それは患者さんが一番に感じとるはずで、ここが無言の信頼関係の始まりでもあると考えます。また、それは手技に対しての評価としても自分に戻るものであり、自分の程度を知ることにもなります。晴れがましくもあり、情けなくも教えてくれる厳しさの一面でもあると思います。常に実習に臨むにあたり心してきた「思い」ですし、日々研鑽の重要性にも繋がる所以です。この言葉はいつも、SRP（スケーリング・ルートプレーニング）の実習開始時に伝えてきました。ただ付着物を取ればいいのではなく、「慈しむ」思いがあってこそその手技であると。

2. 歯科衛生士、教員の出会い

歯科衛生士になったきっかけは、入学試験の面接で、小出忠孝先生に、「女の子は、歯科衛生士がいいよ」と言われた御縁で始まりました。また、教育への道は、恩師高山陽子先生より、インストラクターをやってみませんか？とのお誘いにより始まり、折しも学生数が一学年50名となった昭和50年（1975年）に、末盛の歯学部附属病院3階補綴科の前にあった『歯科衛生士学院』の一教室から楠元学舎4号館（現在は薬学棟1階食堂にあたる）1・2階に移転された年でした。校舎は、昭和時代の名残で、入口は一枚板の鉄扉、窓には鉄格子がはまり、入ると半地下の広い廊下が続いており、今の学生が賑わう楠元学舎とは想像もつかないくらい静かな学舎で、愛知学院の本部組織と歯科技工士学校そして歯科衛生士学院のみ存在するがらんとした学舎でした。それでも教育に注ぐ施設の充実さはすばらしく、当時全国では珍しいマネキンが一人1台と、歯科医療が水平位診療の始まったばかりの時代なのに、学生3人に1台のデンタルチェア全17台の充実された設備で、実技教育を大切にしている学校方針の現れでもあったと感じました。それ以来47年間勤めさせていただけたこと、多くの御縁と支援でこの3月に定年を無事迎えることができることに感謝の念は耐えません。

3. 教育の変遷

歯学部附属病院で過ごした学生時代は、1学年25名が病院内にある一教室で、講義、マネキン実習、中にはスタディモデル作成の印象から石膏注入までというすべての基礎系実習が行われました。相互実習室は、当時2階北館の最西端にあった口腔衛生科の診療室で診療が終了する3時頃から、歯科衛生士教育の実習室として舞台替えをし、相互実習が行なわれていました。それに比べれば、教員として入職した昭和50年（1975年）からは充実した施設の中で行われた幸せな環境で、現在も施設の充実さは全国に類を見ないと考えます。ただ教員数は、4名でしたから、口腔衛生科の患者実習、2年生の臨床実習に当時教員の山中幸子先生、高阪利美先生の2人が担当され、高山陽子先生と私の2名で、50名になった基礎実習、相互実習の教案作成を実習が終わるたびに必死で行っていたことが思い出されます。高山陽子先生からは実技教育とは何かを根底から教えていただき、その後の教員免許取得時にも大きな力となりました。「教員は3日やるとやめられないよ」と教えられたことを思い出します。完成した授業、実習はなく、未だに始まる前には緊張しますし、本当によかったのだろうか毎年見直しの日々が続いています。絶対同じ授業・実習はないと感じています。日々情報が進化するに伴う変化とも考えます。

折しもその時代、全国的レベルでの歯科衛生士養成所教員をとりまとめる全国歯科衛生士教育協議会会長が、故榊原悠紀田郎先生であったことから、本学で新任歯科衛生士教員講習会第1回開催に繋がり、教案作成や実技教育の内容の全国レベル統一に向けて発信された時代でもあります。そこに愛知学院の歯科衛生士教育を担う役割は大きかったのだと覚えます。

また、愛知県下の歯科衛生士養成校の先生方との交流の場作りを、高山陽子先生と当時の名古屋デンタル学院の岡崎やよい先生とのご提案により発足され、愛知県下11校の養成校の先生、総勢40名近くが一同に会し、（現在はコロナ禍のため中断中ですが）1年間の慰安と交流を目的として現在も輪番の当番校での繋がりが続いています。

主事榊原悠紀田郎先生、教務主任高山陽子先生の御退任後は、校長代理中垣晴男先生、教務主任高阪利美先生に引き継がれ中部地区先陣を切って、3年制教育の短大化へと進められました。

平成18年（2005年）愛知学院大学短期大学部歯科衛生学科が立ち上がり、学科長向井正視先生、教務主任酒井英二先生により短期大学部3年制教育が始まりました。当初は、専門学校50名学生数から1学年

100名に対応すべくすべてが見直しの繰り返しでした。体制をとにかく整えよう、まずは3学年無事に修了できるようにと教員が一丸となり取り組み、実習も一から作り直しが進んだ時代でもありました。

年々活動も進み、平成23年～27年(2011～2015年)には、新たに国際交流として台湾からの留学生を受け入れ研修が行われ、後藤君江先生、柳原保先生と研修プランや実習を担当させていただきました。台湾は、歯科衛生士の国家資格はないのですが、4年制大学で「口腔衛生士」として学び、病院、企業、歯科診療所で活躍しています。今では、アメリカに渡り歯科衛生士ライセンス取得者や大学院に進学し教員になっている方もあります。さらに本学との交流を求めています。コロナ禍のため実現が困難な現状は残念ではありません。研修時にホームステイ先として1か月間、共に生活したことは、家族共々貴重な体験でした。

短期大学部も現在では16年目の新入生を迎え、高齢者時代の世中のニーズに応えるべく教育内容も充実し、現在学長の引田弘道先生の元、教員も学科長犬飼順子先生始め、5名の教授、4名の准教授、講師3名、助教2名、助手2名の組織となり、短期大学として教育、研究、臨床へとバランスを求めて組織活動が進んでいます。

歯科衛生士専任教員、実習助手の先生方はすべて本学卒業生であり、特に実習中の指導には、教育経験、臨床経験からのアドバイスもあり、技能教育では貴重な環境といえます。教員の年齢層も厚く、お姉さん、お母さん、年を重ねた経験豊かな各年代の役割で学生指導にあたり、短期大学部らしい教育へと変換され、歯科医師、歯科衛生士の協力体制は全国一とも感じています。

現在、短期大学部の更なる発展とSDGsの一環事業として令和2年(2020年)から、中部地区の歯科衛生士を対象に厚生労働省委託事業の歯科衛生士復職支援事業であるリカレント研修センターが開設され、稲垣幸司所長、高阪利美副所長を筆頭に教員および山田義文事務局長初めとする事務職員の方々が一丸となり事業を展開し2年目を迎えています。

4. 実習内容

本学の教育内容の大きな特徴は、基礎教育、歯学部附属病院での臨床実習、国家試験対策の三輪の和の調和が大きくあげられると考えます。

歯学部附属病院での臨床実習は、100名余りの学生が、平等に最新歯科治療の環境で行われることにあります。教育内容はもちろんですが、そこで学生指導に

あたる指導者の歯科衛生士の方々には本学卒業生がほとんどであり、愛知学院大学短期大学部を卒業するならば、これだけはしっかり力をつけて卒業して欲しいという思いが力強い指導にも込められています。指導者自身も附属病院で臨床実習を学んだ教育を源に、後輩育成へと受け継ぎ、毎日力を注いでくださいます。学生ができなかったとき、きっとその気持ちもわかるけどこれだけは言うておかないと将来歯科衛生士として活躍できないと、医療の厳しさを説いてくださいます。学生もできない自分との葛藤や目の当たりに自分をさらけ出すこととなったときの戸惑いはいかばかりか。その気持ちはきっと指導者も重々わかっての対応です。そこにある熱い思いには敬服し感謝の念でいっぱいです。また、学生自身も臨床の現場に出て1か月もすると大きく顔つきが変わり何よりの成長を感じるところです。入学受験生が本学志望動機で、毎年一番にあげる理由が歯学部附属病院での臨床実習をあげる所以でもあります。

また、短期大学部になり、歯学部同窓会のバックアップもあり一般歯科診療所でも臨床実習が行われています。実際に就職する歯科診療所とはどういう所か、地域医療とかがかりつけ歯科の意味は何か、その中で歯科衛生士の役割は何か、憧れの歯科衛生士像を求めて実体験することは貴重な臨床の場です。今では、その医院で卒業生が指導者として後輩の育成にあたっている実習先が増えてきています。これも愛知学院の総合力で学校を支えられている所以です。

基礎実習では、歯科衛生士学院第1回生から現在に至る52年間続く実習の一つに、名古屋市立西山小学校での6月の歯の衛生週間に行われる歯科衛生教育、歯磨き指導の活動があります。半世紀に渡り継続できることは、小学校の先生方始め、学校歯科医師の先生、関係者の努力の賜の賜と思ひ、さらなる継続を大切にされることを願っています。その場で自身の小学生時代の恩師が校長として就任されており再会したことは、巡る縁の繋がりを感じました。

国家試験対策では、印刷様式も変わりました。入職当時の昭和時代は、鉄筆でガリ版原稿、輪転機で印刷していたものが、コピー機、ワープロが出現、現在ではパソコンで写真・資料を取り込む機器の発展で対策も移り変わりました。当時は学年の担任・副担任が対策を担当し、該当年には自分の子供の受験よりも気をもみ、必死で指導にあたっていたことを思い出します。全員合格できた年には、安堵で必ず終了後に発熱していましたが、現在短期大学部では、チューター制の導入や模擬試験の充実により体制も整っています。

5. 歯科衛生士教育への思い

一番うれしいのは、卒業生が独り立ちし、社会に歯科衛生士としてそれぞれの価値を見だし、社会貢献できている姿に触れることです。それは、結婚・子育てで一端離れたとしても、また歯科衛生士がやりたいからと戻ってくる姿にも接した時です。

中には学生時代に、他の道に変わりたいと幾度も相談を受けたことがあります。面談の報告をした時です。高山陽子先生から「あっちゃん、信じてみるかね。」と学生を待ちますが、何度振り出しに戻ったことか……。でも彼女たちが自立し、あの時学校をやめなくてよかったと声をかけてくれ、感謝の言葉を贈ってくれた時は、こちらが心の宝物をいただいてしまいます。今では海外で活躍する卒業生もいます。

学生時代は、あんなに遅刻や欠席ばかりしていたのに、「えっ、歯科衛生士続けているの?」「やっぱり歯科衛生士がやりたい」「毎日遅刻もせず休まずがんばっているよ」と報告してくれることは教員冥利に尽きます。また子育てに専念していても、しっかり躰をしている姿に接すると感服です。

「先生は、教員をやっていて一番よかったと感じる時はいつですか?」と講師の原山裕子先生から、彼女が入職2年目の時に問われたことがあります。「そうね、卒業する時かな」と返した覚えがあります。2年制教育時代は、19、20歳、現在は3年制教育のため21歳ですが、この青年期の彼女たちの成長には目をみはるものがあり、卒業式の輝く笑顔は、何かを乗り越えた自信に満ちて本当に美しく、心から「おめでとう、よくがんばったね」と自然にこちらの笑みもこ

ぼれます。出会った喜び、一緒に過ごした時間の幸せな瞬間です。47回も味わうことになりました。その卒業生の姉妹や御令嬢が入学される運びとなったときは、心からの喜びであり同窓生の学校への信頼の思いは何よりの宝です。

6. バトンの受け渡し

令和4年(2022年)3月31日をもって教員生活に一つの区切りをつけることとなりました。「電話一本火事の元」と毎日毎日事が起こる度に、「さあどうしよう」と先生方、事務職員の方々と取り組んでいた一つ一つの事象が走馬燈のように思い出されます。いよいよ次の時代の先生方へバトンを受け渡す時が来ました。「変わっていくこと」「変わらなければいけないこと」「変わってはいけないこと」を大切にして、繋げていただけたら幸いです。

最後に教員事務室にあった思い出のアルバムより、代々の先生方が残してくださった貴重な学校の様子、施設の変遷の写真を掲載させていただくことをお許しいただき、楽しくも必死で過ごさせていただけた毎日に、多くかかわらせていただいたすべての皆様に心より感謝を申し上げ、母校と皆様の益々の御発展をお祈りし、筆を納めさせていただきます(図1~18)。ありがとうございました。

本学の歯科衛生士教育の変遷と思い、特に担当しました実習教育への思いを心の向くまま綴らせて頂く機会をいただきました学科長犬飼順子先生、稲垣幸司先生に心より感謝申し上げます。

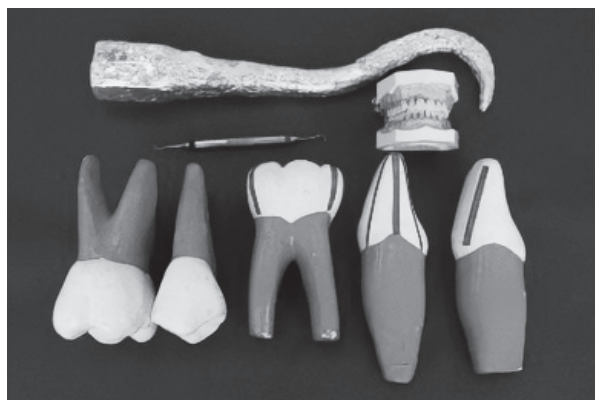


図1 開校以来使用され半世紀を超えている実習教材
現役です

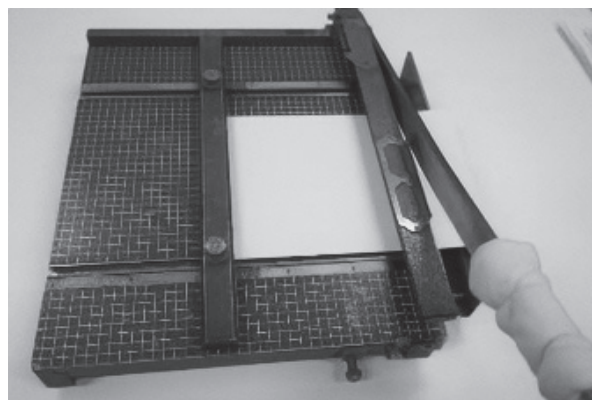


図2 私の入職と同時に使用されてきた裁断機
現在も新タイプと共存して活躍しています



図3 実習衣の移り変わり

左より第一回生の実習衣から右端 2022 年までの実習衣

【教室・実習室の移り変わり】

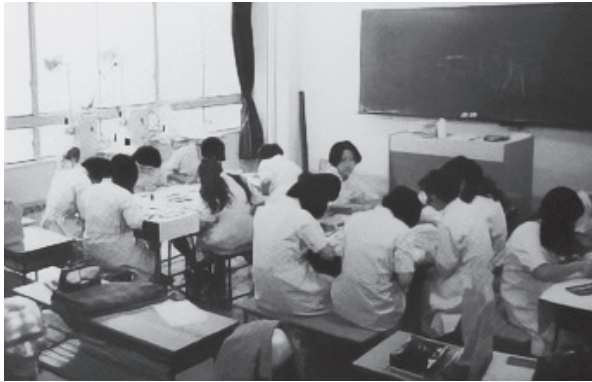


図4 末盛学舎附属病院 3F が教室兼模型実習室
講義から実習全てを行いました
開校から昭和 49 年（1974 年）まで使用



図5 立位診療
昭和 40 年（1965 年）代 1 回生～5 回生まで



図6 右水平診療へ
昭和 48 年（1973 年）6 回生より（学生数 25 名時代）
口腔衛生科の診療室が実習室に舞台替え



図7 昭和 50 年（1975 年）
第 8 回生入学（定員 50 名時代へ）
楠元学舎への移転後の施設



廊下にはたくさんの図書が並んでいました
卒業生記念品の人形が並んでました



図8 ポケット付き机に変わりました



図9 マネキン実習室
一人掛け机にマネキンを設置して（昭和50年（1975年））



図10 長机で実習内容が幅広く使用できるようになりました
マネキンもすっきり近代的に軽くなりました



図11 昭和50年（1975年）の臨床実習室
初めて専用の臨床実習室ができました

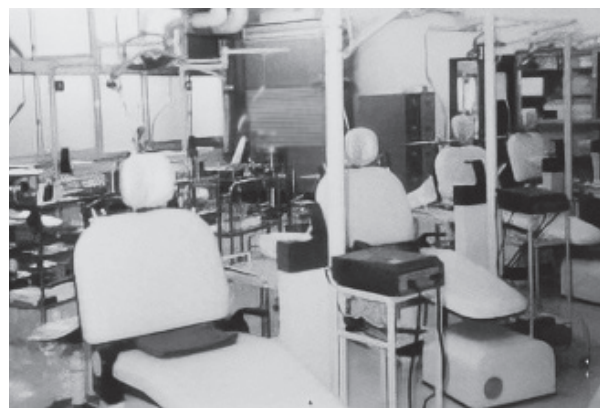


図12 花柄のやさしいチェア交換

【短期大学の開始 平成 18 年（2006 年）】



図 13 短期大学部時代へ
旧短大棟 教室前と重厚な階段



図 14 薬学棟短大 模型実習室
短期大学部開校当初より実習室は充実された



図 15 臨床実習室
現在は新チェアに交換中 令和 3 年（2021 年）



図 16 現在の短期大学部校舎



図 17 変わらない毎年入学式に開花する桜
本部棟正面玄関



図 18 いつも学生を見ていた大桜